〈論　文〉

〈不和〉のテクスト――太宰治『惜別』

松　本　和　也

要　約

本稿は、太宰治が太平洋戦争末期に執筆した、若き日の魯迅をモチーフとした『伝記小説　惜別　医学徒の頃の魯迅』を、戦後の先行研究において偏重されてきたイデオロギー批評（とそれに連動した低い評価）を相対化し、歴史的な視座から読み直す試みである。

本格的な読解に先立ち、先行研究の批判的検討に続き、テクストの構造を分析的に整理し、『惜別』が内包する時間軸とその書法を明らかにした。その上で、歴史的な補助線として当時ブームとなっていた伝記小説（言説）を参照しながら、『惜別』のテーマ設定の特異性について考察した。さらに、小説内／外に関わる地方文化運動（言説）も参照し、『惜別』の歴史的な位置を検討した。以上の読解を総合するために、「アジア」という難問をめぐって〈不和〉（Ｊ・ランシエール）という概念を導入した上で、テクストに散見される〈不和〉の様相を読み解き、『惜別』に刻まれた歴史（の痕跡）を明らかにした。

キーワード

太宰治　『惜別』　伝記小説　地方文化運動　不和

1　テクストの歴史性へ

日中戦争・太平洋戦争末期（以下、戦争末期と略記する）、大東亜共同宣言の五大原則を作品化するという日本文学報国会・情報局の呼びかけに応じ、「独立親和」を体現・周知するため書かれた太宰治『伝記小説　惜別　医学徒の頃の魯迅』[1]は、1945年９月５日の奥付を付して朝日新聞社より刊行された。太宰本人が「何だか間が抜けました」[2]と嘆じたゆえんである。 1

そのような太平洋戦争に関わる負の歴史的表徴を刻印された『惜別』は、それゆえに「太宰の小説としてもそうだが、近代の日本文学史の中でも異端視されざるをえないものを持っている」[3]と評されてもきたが、近年、複数の観点から再検討の機運が高まっているようにみえる。

太宰治『惜別』に関する先行研究は思いのほか多いが[4]、ここでは近年の研究論文内におけるまとめを参照しておきたい。第一に、藤原耕作によって「太宰治の『惜別』は、現在まで成立事情とからめて抵抗／便乗という価値尺度で測られることが多く、また、魯迅理解・中国認識の深浅という尺度もそれ

まつもと　かつや：淑徳大学　人文学部　兼任講師

に付随して使われることが多い」[5]という論点・論じ方の整理が示された。第二に、「同作を特徴づけているのは、第一に「医学徒の頃の魯迅」を描く「伝記小説」という枠組みを有する点であり、また第二に日本文学報国会の「大東亜共栄圏五原則」の作品化の企画の下での、「独立親和」の原則の小説化という国策的な文脈を背負っていたということ」だと指摘する仁平政人が、「「惜別」の研究史は、この二点に関する批判的な検討から始発している」[6]とまとめている。こうした論点を総合して明らかになることは、『惜別』が戦時下（／戦後）のイデオロギーに包まれたまま論じられてきたということである。

したがって、『惜別』研究史においては、こうしたイデオロギーへの立場表明が陰に陽に要請されることが多く、しかも固着したそれに囚われることで、テクストの歴史性はむしろ看過されてきた。このような研究状況を批判的に捉えた斎藤理生は、『惜別』研究に関して「近年は、戦時下の日本に迎合しているとも、揶揄しているとも読める小説の複雑な構造に注目する立場からの解釈が行われてきている」[7]ことを指摘し、若松伸哉は「時局を含めた同時代の言説布置を確認しつつ、改めて『惜別』を考察してみたい」[8]と、それぞれ新たな研究の方向性を示した。

本稿もまた、こうした近年の研究動向をうけて、『惜別』が同時代言説とどのような切り結びを演じていたのかという問いから、テクストに折りたたまれた歴史性を読むことを目指す。

2　テクストの構造／2つの歴史

本節では、まず『惜別』の構造を整理・確認していく。「惜別」が「三人の語り手を内包している」ことを指摘する高橋宏宣は、「「手記」の「私」（田中卓という名の老医師）、作品「藤野先生」の「僕」（魯迅）、そして「手記」と「藤野先生」を読者に紹介する「自分（太宰）」」をあげ、「この三人の語り手の配し方が「惜別」という作品の構造上の特徴」[9]だと論じている。こうした語り手＝言表の主体に即してテクスト構造を理解しようとする時、ナンバリングされた章がない『惜別』に4箇所みられる一行空きと、魯迅「藤野先生」引用直前のイレギュラーな改行（1箇所）が手がかりとなる。それぞれの分量比もわかるように、初刊単行本のページとあわせて以下に整理しておく。

Aパート〔p.1〕：「一老医師の手記」が紹介される。言表主体はおそらく「自分（太宰）」。

Bパート〔pp.1-6〕：新聞記者の取材を受けてから、「私」（田中卓）が藤野先生と周さんのことを書こうと決意するまでの「一老医師の手記（1）」。東北地方が空襲をうけていた時期として、『惜別』執筆時に重なる1944（昭和19）年7月の時間軸が想定される。

Cパート〔pp.6-141〕：「私」（田中卓）が仙台医学専門学校で過ごした藤野先生と周さんとの日々を書いた「一老医師の手記（2）」。時間軸は、主に1905（明治38）年。

2 **Dパート**〔pp.141-155〕：「私」（田中卓）が、周さんが帰国を決意して以後の仙台医学専門学校時代の日々を書いた「一老医師の手記（3）」。時間軸は、主に1906（明治39）年（**Cパート**のつづき）。

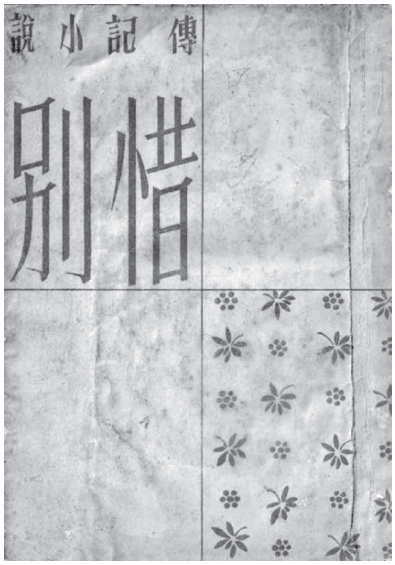
Eパート〔p.155〕：言表の主体「自分（太宰）」が手記の終わりを告げ、魯迅「藤野先生」の引用を予告する。時間軸はおそらく1944（昭和19）年（**Bパート**より後）。

Fパート〔pp.155-158〕：言表の主体「自分（太宰）」が抜粋・引用した、松枝茂夫訳「藤野先生」の一部。

Gパート〔p.158〕：魯迅選集の日本での出版に際して、魯迅が「藤野先生」だけは入れてもらいたいといったという情報が提示される。言表主体は「自分（太宰）」で、時間軸は1944（昭和19）年（**Eパート**のつづき）。

このように一望すると、『惜別』というテクストが「一老医師の手記（１～３）」（Ｂ・Ｃ・Ｄ）をメイン・パートに据え、それとあわせて「藤野先生」（Ｆ）をオブジェクト・レベルに並置することで、メタ・レベルにおける「自分（太宰）」（Ａ・Ｅ・Ｇ）がそれらを構成・配置しているという構造が明らかになる。

もちろん、「藤野先生」が「一老医師の手記」に対置されることで、（すでに「一老医師の手記」内でも問題化されていた）周さん像や文学救国への転身（の契機）が相対化される効果は明らかである。



図：太宰治『惜別』
（朝日新聞社，1945）

ただし、より重要なのは、『惜別』というテクストが言表主体の位置する時間軸を異にする３種のパートを擁することによって、複数の時間軸をとりこんでいる点にある。「藤野先生」の執筆や日本での選集収録の時期がテクスト内で明示されることはないが、テクストの主要パートを構成する「一老医師の手記（２・３）」（Ｃ・Ｄ）は1904～1905末年、その端緒となった「一老医師の手記（１）」（Ｂ）と「自分（太宰）」による語り（Ａ・Ｅ・Ｇ）は1944年と、２つの時間軸が書きこまれている。それゆえ、単に現実世界において執筆・刊行された時期という以前に、1904～1905年の出来事を主要モチーフとした『惜別』というテクストには、戦争末期（1944年）という時間軸が、重い意味を担って内在化されているのだ（「一老医師の手記（２・３）」（Ｃ・Ｄ）においても、「私」＝田中卓が空襲下における書記行為の現在を、楽屋落ちよろしく露呈する場面も散見される）。別言すれば、『惜別』においては日露戦争期の物語内容が、太平洋戦争末期の物語行為（引用＝再配置も含む）に包みこまれているのだ。

こうしたテクストの時間構成について、「しばしば読んでいるうちに、当の戦争は日露ではなく、第二次世界大戦でもあるように話がすりかえられているように感じられて仕方ありません」と評すウィリアム・Ｊ・タイラーは、「太宰が意図的に不明瞭な要素を導入する事により時間的秩序感を錯乱し、作品解釈に幅を持たせ、皮肉や逆説的な読み方を充分可能としたのではないでしょうか」[10] と論じている。しかし、すでにテクスト構造に即して分析的に整理したように、『惜別』の時間は、漠然と多義的なものとして解釈可能性にひらかれているわけでなく、明確な２つの時間軸が重ねられることによって構成されている。

しかも日露戦争期／太平洋戦争期という２つの時間軸は、テクスト外の同時代言説とも共振している。日露戦争を参照することで太平洋戦争を改めて意味づけていく言説として、たとえば次に引く、谷萩那華雄「日露戦争と大東亜戦争　陸軍記念日を迎へて」（『日の出』1943年３月）がある。

> 戦局の前途は益々光明が輝いて来るといふわけでありますから、陸軍記念日を迎へて日露戦争時代のことを顧み、現在の大東亜戦争に思ひを致し、戦争の特質の非常に変つて来たことを考へて大いに国民の一致団結を固め、戦争意識を昂揚して士気を旺盛にし、自己の生活を切り下げて生産――増産に向つて邁進をしなければならんのであります。（p.31）

ほかにも、太平洋戦争開戦以来、日露戦争（勝利）の記憶を召喚する言説は多い[11]。ここで重要なのは、戦争（敵国）の変化にもかかわらず、国家間戦争へと向かう内面的な戦意「昂揚」が、今も昔も通底するものとして書かれていることである。しかも、この２つの時間軸は一方通行ではなく、相互往還可能な回路を擁して構造化されており、同様の仕掛けは『惜別』というテクストにも日露戦争に関わる

「私」（田中卓）／太平洋戦争に関わる「自分（太宰）」という設定によって埋めこまれている。

また、戦争末期の言説上においては、戦争という主題に限らずとも、明治時代（明治維新）が再評価されていく機運がみられた。その代表として、「特輯　明治文化の精髄」（『文学界』1944年1月）を参照しておく。青野季吉は「明治の偉大さ」において、「明治の偉大さの根源」に、「五箇条の御誓文の大精神」を見出し、「簡単明瞭で、行動的な直截さを持つ」ものであるがゆえに、それを「国民がじつさいに信じ、最後の拠り所とした」（p.19）のだと論じている。こうして青野は、近代日本国民の起源として「明治」を再評価する。吉田精一は「明治文化の底流」において、明治文化について「国をあげての欧化時代をもつた為に、却つて日本は最強に自己を鍛へ、それによつて自己をヨーロツパから浄めることが出来た」（p.25）と論じる。さらに、「明治時代の文化が、大正以後の文化と相違する点の一つは、単に西洋的なものの尊重、憧憬のみならず、東洋的な教養にも富んでゐたこと」（p.27）を指摘する吉田は、「西洋的なものの憧憬と追求とに余事なきうち」に、「東洋的なる精神が、根柢にあつて動かなかつた」、さらには「その憧憬や追求が、次第に実現されてゆく可能性をもつた、いはゞ現実的な性質だつた」（p.29）と論じている。「僕等が明治時代の文明開化の風潮について論ずるとき、まづ何より忘れてはならないのは、これが当時の人心を支配した力の深さまたは激しさ」（p.32）だと指摘する中村光夫は「文明開化の性格」において、「いはば文明開化は一時期の明治政府の実践した一種の文化政策であつた」と断じ、しかもそれは「まづ何よりも積極的な新文化の創造」であり、「生きた文化の母胎たる社会生活の更新」と「これと表裏をなす国民精神の刷新」（p.33）だったと指摘する。さらに中村は、「今日の日本文化に影響を与へたのが、よかれあしかれ明治時代であるとすれば、この時代の社会を風靡した風潮が、現代人の生活に無縁である筈はない」（p.35）と言表し、明治時代を切り離された過去としてではなく、現代へと連続する起点として捉えている。

総じて、戦争末期において、明治時代（明治維新）における近代・西洋文化の移入の意義・現代性は、積極的に評価されていた。こうした、アジア・太平洋戦争期における近代・西洋文化の再評価は1935年前後に創作や文化論のかたちで隆盛をみた後[12]、「近代の超克」として1942年には文化人によるシンポジウムのかたち[13]で、明治維新以降の日本における近代・西洋の意味が問い直されてきた。こうした文化領域における言説闘争も、大東亜戦争（の勝利）によって解決されるものとして、そのイデオロギーは構築されていた。西洋文化をとりいれて近代化に成功した日本が、しかし日本本来の伝統を再発見することで、大東亜共栄圏の盟主としてアジアから欧米列強の暴虐を排すという理念である[14]。こうした大文字の歴史は、設定や登場人物、テクスト構成を通じて『惜別』にも折りたたまれている。

あるいは、テクストに即していうならば、メイン・パートとなる「一老医師の手記（２・３）」（Ｃ・Ｄ）が書かれた経緯を確認すればよい。それは、太平洋戦争期において、まさに「独立親和」よろしく、かつて仙台に若き日の魯迅が留学していたことを知った新聞記者が、「私」（田中卓）に取材して「日支親和の先駆」を書いたことを起点としていたはずだ。もとより『惜別』は、Ａ・Ｅ・Ｇパートの言表の主体「自分（太宰）」によって魯迅「藤野先生」と並置されることで構成されているが、「一老医師の手記（２・３）」（Ｃ・Ｄ）がこのテクスト成立の与件ともいうべきメイン・パートであることは間違いない。そのことが書かれる端緒自体が、太平洋戦争期における地方文化の再発見という同時代状況であったことはここで改めて確認しておきたい（地方文化の同時代的意味については本稿**4**で詳論する）。

4

3　周さんの物語／（反＝）伝記小説

前節で論じたように、『惜別』が戦争末期に日本近代（明治維新～日露戦争）を再演するテクストだと

して、それが意味するのは単なる拙速に輸入された近代・西洋文化の再評価でも、それを日本化し得たナショナリズムの顕揚でもない。『惜別』に書きこまれた文化地図には、西洋と日本の間に、東洋−中国という、重要な第三項が書きこまれている[15]。若き日の魯迅というモチーフ[16]は、「独立親和」というスローガンや太宰の意図は措いて、1940年頃から文学場で隆盛をみた伝記ブームとも重なる[17]。

こうした論点に関して、「文豪を隣人として描いた伝記が、太宰なりの「独立親和」の物語であった」と『惜別』を捉える斎藤理生は、「それが、文学報国会が望んだプロパガンダと大きく異なることは間違いない」[18]と断じている。ただし、『惜別』の同時代的意義はそれほど単純ではなく、戦争末期における伝記（小説）というジャンルがもつ含意も考慮すべきである。

改めて事実確認をしておけば、「『大東亜共同宣言五原則』作品化」（『文学報国』1945年1月10日）などで報じられた通り[19]、太宰治は日本文学報国会の呼びかけに応じて、自ら「『惜別』の意図」[20]を執筆・提出し、採択されたことによって「『独立親和』の原則」を作品化して『惜別』を書いた。テクストをどのように読むか／読んだかは措くとして、少なくともプランとしての『惜別』は日本文学報国会・情報局に承認されている。また、内容に関しても、日本を代表する藤野先生と中国を代表する周さんという、東洋二カ国をまたぐ関係が書かれており、しかも、周さんは近代化を遂げた日本へ留学に来ている。さらに、「一老医師の手記」に書かれる周さんは、二段階で日本を再認識（再評価）していた。第一に、「東洋当面の問題は、科学だと何度も繰りかへして言つてゐた」（p.30）という周さんは、「日本の維新の思想が、日本の一群の蘭学者に依つて、絶大の刺戟を受けたといふ事実を知」り、「これだからこそ日本の維新も、あのやうに輝かしい成功を収めることが出来たのだと思つた」（p.49）と、西洋科学を日本近代化のエッセンスとみていた。第二として、日露戦争における日本の勝利後、「日本には国体の実力といふものがある」という周さんの発言について、「私」（田中卓）は「これはいかにも平凡な発見のやうではあるが、しかし、私はこの貧しい手記の中に最も力をこめて特筆大書して置きたいやうな、何だか、そんな気がしてならないのである」（p.97）と付言することで強調していた。その際、明治維新の成果（近代化の成功）に関する気づきについて、周さんは次のように語ったという。

> 彼〔周さん〕は、明治の御維新は決して蘭学者たちに依つて推進せられたのでは無い、と言ひはじめた。維新の思想の原流は、やはり国学である。〔略〕曰く、国体の自覚、天皇親政である。天祖はじめて基をひらき、神代を経て、神武天皇その統を伝へ、万世一系の皇室が儼乎として日本を治め給ふ神国の真の姿の自覚こそ、明治維新の原動力になつたのである。（pp.97〜98）[21]

このようにして、『惜別』において「私」（田中卓）が書いていく周さんは、中国人が西洋的要素ではなく「国学」において近代日本を再評価し、西洋を討伐すべき東洋の盟主として帝国日本を承認していたことになる。そのようなかたちで登場人物・周さんを書いたのは、「社会的政治的の意図よりは、あの人たちの面影をただていねいに書きとめて置かうといふ祈念のはうが強い」（p.5）と言明していた「私」（田中卓）であったことはには留意したい。『惜別』とは、その程度には政治的な小説である。

いわゆる歴史小説ブーム[22]と前後するようにして、1942年に入っても、徳永直が「文芸時評　伝記小説について」（『新潮』1942年2月）において「伝記物とか歴史物とかが、やはり傾向の一つとなつてゐるやうである」と指摘する状況があり、これは太平洋戦争開戦のインパクトにもよる。同論で徳永は、「文学的にも大きな転換期といふか過渡期といふか、そんなときに作家が平生私淑する過去の有名無名の人物の生き方を検討し感動することから新たな踏みだしを作らうとするのであれば十分に積極的だと思ふ」（p.76）と論じて、過去の人物をモチーフとすることを消極的とみる声に反論しつつ、持説を述べて

いた。よりナショナリズムに近接した捉え方から「日本を中心とする新しい世界観が打建てられつつある今日、伝記文学の興隆が要望される理由には深い理由がある」という観察を示す「伝記文学について」（『文芸』1942年3月）の片岡鐵兵は、その「理由」を具体的に次のように述べている。

> 第一に、古から今にかけての史上の人物の動機を究明することによつて、日本の精神がどういふ風に彼の中に生きてゐるかを見、逆にまた、その精神に組織された彼を構成することは、大東亜建設の事業に対しての詩の参加である。第二にはまた、日本歴史の積極的部面を、対象人物に結びつけて強調することによつて、日本の世界に対する優位性の伝統を掘り出し、今日の戦争についての道徳的確信を一層強化する精神武装となり得る。（p.74）

さらに片岡は、「歴史の中から民族の詩を感得せずしては、私共の伝記文学は成らないのではないか」（p.78）とまで述べて、日本人が日本の「民族の詩」を書くべきジャンルとして伝記文学を位置づけている。また、本位田重美は「評伝の流行」（『読書人』1943年5月）において、評伝が「特に流行を見つつある理由の、すくなくとも重要な一つ」として「われわれの祖先が一個の人間としてどんな生きかたをしてゐたかを顧みることによつて、現在のわれわれの生き方を根拠づけるよすがとしたい」という「国民の切実な欲求に答へることにある」（p.23）と論じて、やはり日本国民が民族的伝統を再認識する契機として位置づけている。

こうした、伝記文学／評伝隆盛の根因に、日本民族の伝統の再発見をみようとする言説が積み重ねられていく中、片岡鐵兵は「伝記文学と史実――実践的な覚え書――」（『文学界』1943年11月）において、より明確に西洋（人）と対比しながら日本（人）における伝記文学の意義を説いていた。「西洋人は作つた詩で過去の人物を包まうとするのであるが、日本人は、対象の英雄のうちに自分の詩があり、自分のうちに対象の英雄があるのを感じる」という片岡は、そのことを「今も昔も貫く伝統に、作者と英雄が血液的につながつてゐる有難さ」（p.28）だと捉え、さらに「現代の我々に祖先に劣らぬ詩情があるならば、我々の詩を以つて、我々の国の歴史をいよいよ美しくするといふことは、日本の文学者に課せられた責任の一つ」（p.29）だと述べて、現在を生きる文学者の課題[23]までを提示してみせた。

さらに興味深いのは、片岡が「附記」として書いた、「最近、支那の歴史上或る人物を伝記的に書かうとしてゐる」ことにふれた後の、その対象選択に関わる次の論理である。

> たゞ、私は漢文学を消化した日本人の子孫であるので、さういふ所に我々が見てゐる東亜共通の精神伝統をたづねるために斯かる題材を選び、そこに托する情熱を以つてひろく皇道共栄圏内の読者に訴へる所あらうとするものである。しかし、外国の歴史を書く瞬間とて、作者は自国の歴史を愛する精神からこれを書くものであることは、勿論のことである。（p.29）

6

ここで注目されるのは、まず片岡が自身の主体形成の一端として「漢文学」（要素としての中国文化）を位置づけていること、本来日本の伝統を書くべき伝記執筆に際して支那人をとりあげるために「東亜共通の精神伝統」・「皇道共栄圏内」という国家よりメタ・レベルの枠組みをもちだしていることである。もとより、これはそのまま、大東亜戦争を正当化するイデオロギー・論理とも相似形を描くものであり[24]、『惜別』もまた、同様の枠組みから説明可能な一面をもつテクストであることは間違いない。

また、同誌同号では、「現実においては、伝記小説の盛行は疑ふべくもない事実」だと認める高木卓が「伝記小説について」（『文学界』1943年11月）において、次のような指摘をしている。

歴史への関心がますます高まつてきたこんにち、まへには漠然と歴史一般へ寄せられた関心が、さらに進んで個人の歴史、すなはち伝記にたいしてまで寄せられるに至つた、といふふうに考へられる。(p.30)

これに関連して、『惜別』に書かれたのが国家単位の友好ではなく個人のそれだという、先行研究の指摘を検討しておく。『惜別』の本文異同を検討した斎藤理生は、「作品名が「清国留学生」から「支那の人」へ、さらに「惜別」へと変化したこと」を指摘した上で、「文豪としての魯迅ではなく、隣国から来た一人の若者として描こうという意図が出発点にあったこと、さらにその意図は人と人との関係を描こうという方向へ動いていきつつあったことをうかがわせる」[25] と意味づけ、若松伸哉も「この作品に期待されていたのは国と国との関係に置き換えられるべき日本人と中国人の友情のストーリーのはずだが、ここで描かれているのは齟齬も含めた〈他者〉としての〈個人〉に向き合うこと」[26] だと論じている。

確かに、『惜別』は一面そうした解釈も可能ではあるが、そもそも既述のように周さん／藤野先生が中国／日本を代表していることは、設定からも内容からも間違いない[27]。

その上で、『惜別』というテクストを、伝記（小説）として改めて点検してみよう。『惜別』において主題化されていたのは、周さんがどのような動機で医学から文学への転身を決意したかである。周さんが帰国を決意したところまでを手記に書き終えた「私」（田中卓）は、次の一節を差し挟む。

ひとの話に依れば後年、魯迅自身も仙台時代の追憶を書き、それにもやはり、その所謂「幻燈事件」に依つて医学から文芸に転身するやうになつたと確言してゐるさうであるがそれはあの人が、何かの都合で、自分の過去を四捨五入し簡明に整理しようとして書いたのではなからうか。(p.138)

上にいう「確言」は、『惜別』Ｆパートに引用された「藤野先生」によって裏づけられているが、それはあらかじめ「一老医師の手記」によって、事実ではないという可能性を示唆されている。しかも、「私」（田中卓）は周さん転身の真の理由を提示しない。それどころか、「どんな理由で、魯迅が自分の過去をそんな工合に謂はば「劇的」に仕組まなければならなかつたか、それは私にもわからない」と言明して、次のように漠然とした謎の解き方まで提案していく。

たゞ、彼〔周さん〕がその自分の過去の説明を行つた頃の支那の情勢、または日支関係、または支那の代表作家としての彼の位置、そのやうなところから注意深く辿つて行つたら、或ひは何か首肯するに足るものに到達できるのではなからうか、とも思はれるのだが、鈍根の私には、そんなこまかな窮竟はおぼつかない。(p.138)

7

周さんの転身の理由として彼の「文学熱」を発見し、また、上記のような漸近線を引きながらも、「私」（田中卓）が確定的に自説を提示することはない。そうした振る舞いをメタ・レベルから反復するのが、「一老医師の手記」に対置するように魯迅「藤野先生」を引用・配置する「自分（太宰）」である。こうした一連の手続きを経て、テクストには構造的に空白が埋めこまれる。

さらにいえば、上の引用につづけて、「私」（田中卓）は次のようなことまで言明していた。

人の心の転機は、ほかの人には勿論わからないし、また、その御本人にも、はつきりわかつてゐないものではなからうか。多くの場合、人は、いつのまにやら自分の体内に異つた血が流れてゐるの

に気附いて、愕然とするものではあるまいか。(pp.138〜139)

ここで考えておきたいのは、モチーフとした人物の人生上の転機を空白にした伝記とは、そもそも伝記と呼べるのか、ということである。少なくとも、典型的な伝記とはいえないはずで、伝記のエッセンスたるべき局面を空白にした『惜別』とは、表面的には同時代のブームに乗った伝記小説の外貌をもつとしても、その実、反＝伝記小説と呼ぶべきものなのだ（ブームと切り結びながら、その内実を骨抜きにするこうした局面もまた、次節で論及する〈不和〉の一例だといえる）。

4　地方文化運動言説／テクストの〈不和〉

前節まで、『惜別』に関わる時間軸、ジャンルについて検討してきたが、若松伸哉は『惜別』というテクストの内／外に関わって具体的に「〈地方性〉の問題」[28]を検討した議論を展開している。そこから導きだされたさしあたりの結論は、次のようなものである。

> 戦時下に推進された〈地方文化運動〉をめぐる言説には、地方から日本全体へ、そしてアジア全体へと、文化を同心円状に拡大・伝播していくイメージが確認できる。しかし、『惜別』における地方（東北）と東京は対立的な関係で描かれ、語り手の「私」はさらに〈東北〉の枠組にもひびを入れるだけでなく、「私」個人が中国表象を帯びるなど、〈地方文化運動〉に見られた、日本文化が地方からアジアまで発展（侵略）的にエリア拡大していく遠近法を倒錯させる。[29]

当時の地方文化運動言説から戦争と連動した「イメージ」を確認する若松は、『惜別』の小説表現がそこから逸脱するものだと指摘している。そうした理解には、新聞記者が書いた「日支親和の先駆」と対置するかたちで、「一老医師の手記」を「何かの目的ありきではなく、あくまで個人の立場から個人を語る手記」[30]だとみる若松の判断（読解）も関わっているだろう。

しかし、『惜別』は当時の地方文化運動言説ときわめて親和性が高く、若松が小説表現から指摘する逸脱は、一連の言説内にもみられる程度のものである。さらにいえば、「一老医師の手記」は純粋無垢な書き物などで決してなく、テクスト全体を通じて「自分（太宰）」が仕掛けているのは「一老医師の手記」と「藤野先生」を対置させた、より正確な周さん（像）をめぐる象徴的な争奪戦でもある（もとより、テクストの空白により、この決着は構造的につかない）。

ここで、太平洋戦争開戦前後以来からの地方文化運動（言説）の特徴・動向を確認しておきたい。1941年には、「言説上では大政翼賛会文化部が主導する地方文化（運動）が支配的となり、内地の周辺部に見出された伝統的文化（日本らしさ）と帝国日本が包摂すべき外地が「地方」という概念に集約されていく——こうした地方文化言説の産出／再編成をへて、国民文化にして大東亜文化でもある帝国日本の文化は形成されていく」[31]。太平洋戦争の進行に伴い、「地方文化（運動）言説は国民文化（運動）、あるいは大東亜文化を牽引すべき日本文化として読み替えられてきたが、昭和19年に至り、言説上において文化と戦争との距離がより近接していった」[32]。たとえば、福田清人が「疎開と地方文化（下）文化職能人の帰郷」（『東奥日報』1944年3月17日）において、「一切が国民士気戦意昂揚と、生産増強に捧げられねばならぬ時、文化職能人も直接間接その生きる面をその場におかねばならぬ、皇国勤労観につらぬかれた新しい文化は、かかる生産の場にあつて初めて生れる」（p.4）と言表したように、文学者にも（積極的な疎開をはじめとした）地方文化への現実的・実践的なコミットが要請されていった。

8

そうした同時代状況を視座としてみれば、『惜別』冒頭（Bパート）で「私」（田中卓）を尋ねてきた新聞記者が「日支親和の先駆」を書いたことはもとより、それを契機に「私」（田中卓）が手記を書き、「自分（太宰）」がテクストを構成したこと（さらにいえば、太宰治が『惜別』を書いたこと）は、それらがすべて仙台／中国という帝国日本＝中央からみた周辺地域＝地方をモチーフとしている時点で、すでに戦時下における地方文化運動言説とシンクロしている。

このように日本国内の地方と大東亜共栄圏各地へ向けられた関心とは、ベクトルは真逆のようでありながら、地方文化運動として同根のものであった。『惜別』執筆の契機ともなった大東亜会議・大東亜共同宣言は、「この会議は、米軍の反攻が本格化しはじめるなか、占領地域の結束を強固なものにし、自主独立国家による大東亜共栄圏樹立という戦争の大義名分を内外にアピールする目的によって開催され、会議では「大東亜共同宣言」が決議された」[33]と、今日からは説明されるものである。直接的にではないにせよ、『惜別』、こと「一老医師の手記」には、大東亜共栄圏を指示し、かつ、肯定する局面が書かれている。留学生としての周さんを面倒見よく指導していた藤野先生は、ある時、「私は東洋全部が一つの家だと思つてゐる」という認識を「私」（田中卓）に示した上で、次のようにつづけている。

> 数年前、東亜同文会の発会式が、東京の万世倶楽部で挙げられて、これは私も人から聞いた話ですが、その時、近衛篤麿公が座長に推され、会の目的綱領を審議する段になつて、革命派の支持者と清朝の支持者との間にはげしい議論が持ち上つた。両々相対峙して譲らず、一時はこのために会が決裂するかとも思はれたが、その時、座長の近衛篤麿公が、やをら立ち上つて、支那の革命を主張せられる御意見も、また、清朝を支持し列国の分割を防止せむとせられる御意見も、つまるところは他国に対する内政干渉であつて、余（ママ）の目的としては甚だ面白くない。しかし、両説の目標とするところは、共に支那の保全にあるのだから、本会は『支那の保全』を以てその目的としては如何であらう、といふ厳粛な発言を行つて満座を抑へ、両派共これには異議無く、満場一致大喝采裡に会の目的が可決され、この『支那の保全』は、爾来、わが国の対支国是となつてゐるといふ事です。私たちは、もうこの上、何も言ふ事が無いやないか。（78～79頁）

ここで藤野先生が全面的に肯定し、「私」にも承認を求める上の発言は、時間軸をまたいで、大東亜共栄圏の論理、大東亜戦争のイデオロギーにも通底するものである。『惜別』総体の縮図とも位置づけられるこのエピソードは、ジャック・ランシエールが次のように定義する「不和」という概念から解釈可能である。

> 不和という語で、ある特定の種類の発話状況を意味することにしたい。つまり一方の対話者が、他方の述べていることを理解していると同時に、理解していないという状況である。不和は、白と述べている人と黒と述べている人の衝突ではない。不和は、白と述べている人と、白と述べてはいるが少しも同じことを考えていない人とのあいだ、あるいは相手が白という名詞で同じことを述べているのにそれを少しも理解していない人のあいだの衝突である。[34]

ランシエールの言葉で補足すれば、「不和という事態は、話すことの意味についての言い争いが、発話状況の合理性そのものを構成しているような事態」であり、「そこでの対話者たちは、同じ言葉で同じことを理解していると同時に理解していない」[35]――そうした様態を指し示す概念である。以下の拙論では、この定義を〈不和〉と表記して鍵概念として『惜別』読解に援用していく。

これを上の藤野先生の発言に重ねてみれば、本来対立する「支那の革命を主張せられる御意見」と「清朝を支持し列国の分割を防止せむとせられる御意見」とが、「支那の保全」として「異議無く」合意をみており、そうした「衝突」の様相は〈不和〉と捉えられる[36)]。

それでいて上の一節には、同じく東洋の一員でありながら、東亜の盟主たる日本が後進の支那を指導していくという含みもある（いうまでもなく、1937年からは日中戦争が進行中である）。つづけて、「東洋本来の道義、とでも言ふべき底流は、いつでも、どこかで生きてゐるはず」、「その根柢の道において、私たち東洋人全部がつながつてゐる」（p.79）という藤野先生は、『惜別』内において、特に政治的な主張や野心などない誠実な人格者として書かれている[37)]。

こうした「一老医師の手記」内の発言とそれを承認するテクスト構成によって、日露戦争と発表時期のアジア・太平洋戦争期が二重写しのように接続される『惜別』においては、脱亜入欧から大東亜共栄圏へと至る明治維新以降の帝国日本が漲らせてきた植民地主義的な欲望が書かれ、テクスト内において肯定されていく。そのようにして「独立親和」を体現する『惜別』は、端的に次のような性質をもつ。

> 「大東亜戦争」開戦時に語られた無数の「解放」言説のほとんどは、救いようもなく独善的である。たとえばある日誌が「大東亜戦争はアジアにおける有色人種の解放運動だ。白人種によるアジアの支配を根本的に覆すまで我々は闘うのだ」と記す一方、植民地「独立」問題には一向に関心を示していないことも、植民地が白人＝西洋の支配からこちら側として日本占領下の「大東亜共栄圏」に入りさえすれば、それは「解放」だという発想を示している。この場合、植民地は「われら」の一員になることしか想定されていない。[38)]

また、先に提示した〈不和〉という観点からいえば、同一の人物・出来事についてのズレを孕む「一老医師の手記」と「藤野先生」とが併置され、それが周さんと藤野先生との関係（別れ）を象徴する「惜別」というタイトルにも掲げられた鍵語によって媒介・統合されることで、そのズレは露呈しない。

つまり、本稿での検証通り、こうした両義的かつ矛盾する事態が、『惜別』にはあからさまな葛藤を表面化させることなく書きこまれている。それゆえ、『惜別』は〈不和〉のテクストと称すにふさわしい。

以上ここまでの検討から、1945年に刊行された太宰治『惜別』の歴史的意義[39)]について、改めてまとめておく。これまでもしばしば指摘されてきたように、太宰治テクストは、同時代の言説と切り結び、時にはその批評性が文学的評価へと接続されることも多かった[40)]。本稿でとりあげた『惜別』は、日露戦争期に仙台に留学した若き日の魯迅をモチーフとすることで、文学場の同時代的トピックであった伝記小説ブームや地方文化運動（言説）に切り結び、そのことによって、太平洋戦争・大東亜共栄圏をめぐる言説とも、一方では共振していた。ただし同時に、そうした歴史の渦中にあっても、支配的な言説に亀裂を走らせる細部を『惜別』は抱えてもおり、そうした相反するものがそれとして差異を際立たせることなく共存するかのようなテクストの様態は、〈不和〉と呼ぶべきものである。さらにいえば、〈不和〉が「一般的に、話している人間の状況そのものに関わる」[41)]ものである以上、『惜別』が〈不和〉のテクストであることは、太平洋戦争（のイデオロギー）やそれを支えた体制への賛否といった両義性の総体を対象化した地点において、不可視のものを可視化していく契機としての意義をも孕んでいる。

ひるがえってみれば、今日からみた太平洋戦争下の言説もまた〈不和〉の様相を呈している[42)]以上、同時代に生みだされた『惜別』とは、そうした〈不和〉をよく体現したテクストであると評価できる。『惜別』というテクストに書かれた言葉が示すのは、そのような歴史（の痕跡）である。

※本文引用は、太宰治『伝記小説　惜別　医学徒の頃の魯迅』朝日新聞社，1945．に拠り、旧字を新字に改め、ルビは省略した。また、本研究はJSPS科研費JP20K00323の助成を受けたものである。

注

1）尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』勁草書房，1971，参照.
2）書簡番号639「小田嶽夫宛太宰治書簡／一九四六・四〔日付不詳〕」『太宰治全集　第11巻』，筑摩書房，1991，p.347.
3）川村湊「「惜別」論――「大東亜の親和」の幻」『国文学』第36巻第4号，1991，p.68.
4）神谷忠孝「『惜別』」神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品研究事典』勉誠社，1995，ほか参照.
5）藤原耕作「太宰治『惜別』論」『福岡女子短大紀要』第55号，1998，p.107.
6）仁平政人「「惜別」と『大魯迅全集』――方法としての「孤独者」――」『太宰治研究25』和泉書院，2017，p.155.
7）斎藤理生「太宰治『惜別』論――魯迅と〈留学〉」林葉子・青木直子編『開く日本・閉じる日本――「人間移動学」事始め』大阪大学大学院文学研究科，2017，p.18.
8）若松伸哉「「孤独（アインザーム）」な交友――太宰治『惜別』と地方文化運動――」『日本近代文学』第104集，2021，p. 1 .
9）高橋宏宣「「惜別」論――「周さん」を語り出す方法をめぐって――」『太宰治研究12』和泉書院，2004，p.85.
10）ウィリアム・Ｊ・タイラー「本音と建前――石川淳「マルスの歌」と太宰治『惜別』」『比較文学年誌』第30号，1994，p.138.
11）拙論「“一二月八日”をいかに書くか――太宰治「十二月八日」」『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』第13章，立教大学出版会，2015，参照.
12）成田龍一『増補〈歴史〉はいかに語られるか　1930年代「国民の物語」批判』ちくま学芸文庫，2010，および，拙論「昭和一〇年前後・世界化する〈文化〉――文化擁護国際作家会議／知的協力国際会議」『人文研究』No.200，2020，参照.
13）拙論「「文化総合会議　近代の超克」同時代受容分析」『国語国文』第91巻第4号，2022，参照.
14）拙論「太平洋戦争期の文化工作言説――南方・諸民族・大東亜共栄圏」『人文研究』No.204，2021，参照.
15）史蕊「太宰治「惜別」論――魯迅「藤野先生」との関連を視座として」（『比較日本文化学研究』2022年3月）には、「太宰にとって、「支那」は紛れもなく多数の国々の中、「独立親和」原則を小説化するにあたって最適な国であった」（p.48）という指摘がある。
16）日中戦争開戦以降の日本における魯迅受容の様相については、拙論「日中戦争期に魯迅はどう読まれたか――追悼特集・全集刊行・小田嶽夫」『文学と戦争　言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』第5章，ひつじ書房，2021，参照.
17）注8）若松論文に、「実在した人物を描く〈伝記小説〉が特に太平洋戦争開戦後の同時代において流行していたこととの関連も視野に入ってくる」（p.12）という指摘がある。
18）注7）に同じ，p.25.
19）拙論「大東亜会議・大東亜共同宣言と文学（者）」『太平洋戦争開戦後の文学場　思想戦／社会性／大東亜共栄圏』第8章，神奈川大学出版会，2020，参照.
20）同文は『太宰治全集　第10巻』筑摩書房，1990．に収録されている。
21）この引用箇所を含め、前後する日露戦争・旅順陥落以降のシークエンスは、初刊単行本版でのべ17ページにおよぶ本文が、再刊『惜別』（大日本雄弁会講談社，1947）においては削除されている。
22）拙論「昭和一〇年代後半の歴史小説／私小説をめぐる言説」『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』第20章，立教大学出版会，2015，参照.
23）拙論「太平洋戦争開戦後における文学者の使命・役割」『太平洋戦争開戦後の文学場』第3章，神奈川大学出版会，2020，参照.

24）拙論「昭和10年代における〈文化〉論：Ⅱ ── 日本文化／大東亜文化／世界文化」『湘南フォーラム』第24号，2020，参照.
25）斎藤理生「『惜別』 ── 再版本における削除を中心に」安藤宏・斎藤理生編『太宰治　単行本にたどる検閲の影』秀明大学出版会，2020，p.91.
26）注８）に同じ，p.11.
27）議論の水準を異にするが、その典型的な実例として、藤野源九郎記念館（福井県あわら市）における藤野源九郎と並べるかたちでの中国の文豪・魯迅の顕彰をあげておく。
28）注８）に同じ，p. 1 .
29）注８）に同じ，p. 9 .
30）注８）に同じ，p.11.
31）拙論「昭和10年代における地方文化（運動）言説 ── 文学（者）を軸として」『人文学研究所報』No.66，2021，p.12.
32）注31）に同じ、p.15.
33）加藤聖文『「大日本帝国」崩壊』中央公論新社，2009，p.221.
34）ジャック・ランシエール／松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳『不和あるいは了解なき了解』インスクリプト，2005，p.9.
35）注34）に同じ，p.11.
36）翟新『東亜同文会と中国　近代日本における対外理念とその実践』（慶應義塾大学出版会，2001）には、「かれら〔東亜同文会〕は、日中関係を主に人種的、文化的な連帯という視点ではなく、むしろ地政学的意識や国家利益の点から捉えた点で共通していた」（pp.305～306）という指摘がある。あわせて、東亜文化研究所編『東亜同文会史　昭和編』（霞山会，1988）も参照。
37）大東亜会議に参加したスバス・チャンドラ・ボース（自由印度仮政府首班）は、「大東亜会議の印象　特別寄稿」として「一筋に貫ぬく道義感　世界再編成の原則なる」（『朝日新聞』1943年11月９日）を寄せ、そこでは「大東亜会議に於ては其処に強国もなく虚偽も恫喝もない、大東亜における新しき国家間の秩序建設の基礎として道義に基く諸原則を確立したのである」（p. 1 ）と言表されている。また、「社説　戦力源としての道義」（『朝日新聞』1945年５月25日），には、「わが東亜新秩序建設の指導原則は道義の上に組み上げられる人類の調和と協力である」（p. 1 ）とあり、道義はこの時期の鍵語でもあった。
38）中野聡「「アジア主義」 記憶と経験」『現代思想』Vol.46-9，2018，p.144．なお、引用文中の引用出典は、榊原政春『一中尉の東南アジア軍政日記』（草思社，1998）である。
39）この時期の太宰治の文学史的意義については、紅野謙介が「太平洋戦争前後の時代 ── 戦中から占領期への連続と非連続」（戦争と文学編集室編『コレクション戦争と文学　別巻〈戦争と文学〉案内』集英社，2013）において、「作家としてもっとも活躍した」と評し、「太宰が三九年から四五年にかけて刊行した小説集の数」が、20冊に及び、「同時期では火野葦平にも匹敵する分量である」ことを指摘した上で、「火野の小説が多く戦争文学をめぐる歴史的な研究資料になってしまっているのに対して、太宰の小説は多くがいまもなお新しい読者を獲得している」（p.91）ことを評価している。
40）拙論「文学作品にみる服装（国民服）の機能 ── 太宰治「服装に就いて」を読む」『Dresstudy』60号，2014，ほか参照.
41）注34）に同じ，p.12.
42）拙著『文学と戦争　言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房，2021，参照.